

ユカギール語の他動詞節における目的語の標示について¹⁾

遠 藤 史

1. はじめに

北東シベリアに話される少数言語の1つであるユカギール語は、他動詞節における目的語の標示において、種々の文法的特徴が関与する多様性を見せる。この現象は言語記述の視点から見ても、また類型論的な視点から見ても興味深い。この論文では、現在話されている2つのユカギール語—コリマ・ユカギール語 (Kolyma Yukaghir) とツンドラ・ユカギール語 (Tundra Yukaghir) —を取り上げ、これら両言語の具体例を、目的語の標示を中心として検討するとともに、それらデータの観察から明らかになる両言語の共通点と相違点を論じる²⁾。論文の後半ではさらに、それらをより広い類型論的視野から眺めることによって、類型論的な位置づけを試みたい。

節を内部構造によって分類すると、1つの項と動詞から成る自動詞節 (intransitive clause) と、2つの項と動詞から成る他動詞節 (transitive clause) に大別できる。Dixon (1994:9) に従って、これらの節に含まれる項の持つ基本的統語関係を、自動詞節における項 S (自動詞主語)、他動詞節における2つの項 A (他動詞主語) および O (他動詞目的語) と呼ぼう。ここで A および O は、個別の言語において、2つの項それぞれが示す様々な文法的現象を観察することによって同定される。近年の言語類型論の研究は、これらの基本的統語関係に立つ項に現れる形態論的な格標示にいくつかの主要なタイプが存在することを明らかにした。たとえば Dixon (2010:119–121) の概観によれば、最もよく見られるタイプは対格システムであり、ここでは自動詞主語と他動詞主語が同一の格 (主格) で標示され、他動詞目的語はこれらと異なった格 (対格) で標示される ($A=S \neq O$)。またこれほど一般的ではないが世界の言語の約4分の1に見られるのが能格システムであり、ここでは自動詞主語と他動詞目的語が同一の格 (絶対格) で標示され、他動詞主語はこれらと異なった格 (能格) で標示される ($A \neq S=O$)。これらの他、3種の項がそれぞれ異なった格で標示される三立型格標示システム ($A \neq S \neq O$) や、自動詞主

1) 本論文は2011年7月9日に開催された東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「北方諸言語の類型論的比較研究」第2回研究会における口頭発表「ユカギール語の他動詞節における目的語の標示について—類型論的視点からの考察—」の一部に基づくものである。発表に対して貴重なコメントを下されたプロジェクトメンバーの皆様方に心からの感謝を申し上げたい。

2) コリマ・ユカギール語はコリマ川上流地域の、特にヤサーチナ川沿いで話される。一方ツンドラ・ユカギール語はコリマ川下流地域の、特にコリマ川とアラゼヤ川の間で話される。両者の言語集団の間に日常的な交流はない。また両言語の相互理解はほとんど不可能であるという指摘がある (Krejnovič 1968:451)。

語の格標示が意志的な動作を行うもの (Sa) とそうでないもの (So) の間で分裂し、それぞれが他動詞主語および他動詞目的語と同じ格で標示される動作格型格標示システム ($A=Sa \neq So=O$) も存在する³⁾。

筆者はすでに、現在話されているユカギール語の1つであるコリマ・ユカギール語のデータを、対格の類型論的機能という視点から検討した (遠藤 2012)。その考察の出発点において、この言語を、ひとまず類型論的には、上記の対格システムを有する言語と捉えることに大きな問題はないだろうと考えた (13)。しかしながらコリマ・ユカギール語の格標示システムは、対格の出現が主語と目的語の人称の関係によって条件づけられている事実から、典型的な対格システムとは性格が異なる点があると指摘した (17)。この議論において論じ残した問題点は少なくとも3つある。第1に、コリマ・ユカギール語のデータに関して、基本的な事例から一歩踏み込んで、より詳細に検討する必要があるのではないか、という点である。特に、主語と目的語との関係を問題にする以上、省略や語順変異など、いわゆる基本語順から逸脱するような事例における格標示の実態について、具体例をあげて検討するべきであろう。第2に、もう1つのユカギール語であるツンドラ・ユカギール語の側での状況を明らかにする必要があるのではないか、ということである。というのは、もし両言語の間で同じ特徴が共有されていれば、それはユカギール語全体にわたる類型学的特徴として指摘できる可能性があるからである。逆に、両言語の間に何らかの相違点があれば、どのような類型論的パラメータがそこに働いているのかを考える契機がもたらされる。そして第3に、格標示と相関しうる他の文法的現象についても検討する必要があるのではないか、ということである。とりわけ、ユカギール語の顕著な類型論的特徴としてしばしば言及される焦点 (focus) もまた主語・目的語に標示されることを考えるなら、格標示と焦点標示との相関についても考察するべきであろう。

この論文では、以上のような問題点を解決することに主眼を置き、以下の順序で議論を進める：次の第2節では、ユカギール語の他動詞節における目的語の標示を、コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の両言語にわたって、具体例をあげつつ検討する。第3節では以上の検討を受け、ユカギール語の他動詞節における標示システムに反映されていると考えられる類型論的パラメータのいくつかを指摘する。第4節はまとめである。以上が本論文の構成である。

3) この他に S, A, O がすべて同じ格 (主格あるいは絶対格) で標示されるシステム (たとえば代名詞を除いた場合の英語のような) も考慮する必要があるだろう。角田 (2009:32) はこのようなシステムを中立型と呼んでいる。なおこの段落における三立型と動作格型という用語も、角田 (2009:32) の用語に従っている。

2. ユカギール語の他動詞節における目的語の標示

2.1 コリマ・ユカギール語

この節では、コリマ・ユカギール語からの具体例をあげ、他動詞節における目的語の標示について検討する。まず節の基本的な構造を確認すると、この言語における節は自動詞節と他動詞節に分かれる。次の(1), (2)は自動詞節の例, (3), (4)は他動詞節の例である。ただしこれらの例においては、動詞は定形動詞（法・時制・人称を標示する動詞）であるため、節は独立した文—自動詞文と他動詞文—となって現れている。

- (1) met nungeden-et kie-če.
私 ラソハ川 -ABL 来る -I1SG
「私はラソハ川（流域）から来た」⁴⁾
- (2) taŋ jaŋkil-ge irkin mumuŋa: e:re-j.
その 湖 -LOC 1 の カタルカ 泳ぐ -I3SG
「その湖に1匹のカタルカが泳いでいた」
- (3) taŋ foromo-pul parna: aʒu:-gele medi-nu-l'el-ŋa:.
その 人 -PL カラス ことば -ACC 聞く -PROG-EVID-T3PL
「その人々はカラスのことばを聞いていたそう だ」
- (4) met sa:sat lukil-e aji:-t.
私 今 矢 -INST 撃つ -FUT/T1SG
「私は今から矢を撃とう」

すでに述べたように自動詞節と他動詞節は内部に含む項の数が異なるが、このことは上の例でも確認できる。たとえば自動詞節(2)には irkin mumuŋa:「1匹のカタルカ」という1つの項(S)だけが含まれているのに対し、他動詞節(4)には2つの項—met「私」(A)と lukile「矢を」(O)—が含まれている。この言語ではさらに、定形動詞における義務的な人称標示（主語の人称を標示する）が動詞の自他によって異なるので、文として現れた場合に限られるものの、動詞の側でも節の構造が明瞭に示される。以下に自動詞と他動詞の人称屈折のパラダイムを示す。ハイフンに後続する部分（接尾辞）が人称標識である：

- (5) modo「住む」(自動詞) juö「見る」(他動詞)⁵⁾
1 人称単数 modo-je juö

4) これ以降、引用元の文献情報の記載のない例文は、筆者が現地調査において母語話者から収集したコリマ・ユカギール語の資料である。

2 人称単数	modo-jek	juö-mik
3 人称単数	modo-j	juö-m
1 人称複数	modo-ji:li	juö-j
2 人称複数	modo-jemet	juö-met
3 人称複数	modo-ŋi	juö-ŋam ~ juö-ŋa:

動詞側における主語の義務的な人称標示の存在は、しばしば文脈から補うことが可能な要素が省略され、表面に現れないことがあるという事実とおそらく関連している。例文 (6) では、動詞の人称標示が自動詞 3 人称単数であることから、この文が自動詞文であり、かつ 3 人称単数の主語が省略されていることが分かる⁶⁾：

(6) tamun-get tude-get jowluʃa:-l'el.

これ -ABL 彼 -ABL 尋ねる -EVID/I3SG

「そこで（その人は）彼に尋ねたということだ」

次の例文 (7) では、動詞の人称標示が他動詞 3 人称複数であることから、この文が他動詞文であり、主語は tan paj foromon'ulgi 「その女の親戚（たち）」であることが分かる⁷⁾。以上より目的語の省略が帰結するので、これを文脈から補って適切な解釈が可能となる：

(7) tan paj foromon'ul-gi jukuodege parna: jajsa-le legite-ŋa:.

その 女 親戚 -POSS [若い -VN/POSS-LOC] カラス 卵 -INST 養う -T3PL

「その女の親戚（たち）は、（その女が）若いころ、カラスの卵で（彼女を）養った」

ここまでの例文を再度観察するならば、この言語では、自動詞節における S と他動詞節における A がゼロ標識の格（基本格）で標示されることが明らかである。たとえば自動詞文 (1) の met 「私」や他動詞文 (3) の tan foromopol 「その人々」はいずれもゼロ標識である。これに対して、他動詞文における O には、たとえば他動詞文 (3) の parna: aʒu:gele 「カラスのこ」とばを」における -gele や、他動詞文 (4) の lukile 「矢を」の -e のように、何らかの形態論的標識を伴った格で標示されうる。このことから、格標示システムはひとまず対格システムと規

✓ 5) 他動詞 1 人称の人称標示は -φ（ゼロ）である。

6) 例文 (6) の最後の単語に含まれる接尾辞 -l'el は、-l'el (EVID) と -j (I3SG) の組み合わせから生じている。形態音韻の交替により、この場合の -j は結果的に脱落し、表面には現れない。

7) 例文 (7) には 1 つの従属節 jukuodege 「若いころ」が含まれている。グロスでは節の境界を角括弧で示した。動名詞の所格形に由来するこの種の従属節は、それを直接支配する節との間で、主語が義務的に異なることが知られている。

定できよう。

この言語における主語の基本格標示は、文中での位置とは相関しない。次の3例における主語（下線部）の標示を観察されたい：

- (8) tamun-ge foromo čumu mol-l'el-ni.
 これ -ABL 人 皆 言う -EVID-I3PL
 「そこで人々は皆（こう）言ったそうだ」
- (9) tet uörpe-gele tet pulut tude mieste-gen tadi:-m.
 君 子供 -ACC 君 夫 彼の 場所 -PROL 与える -T3SG
 「お前の子供たちを，お前の夫は（自分の）場所を通して（どこかへ）やってしまった」
- (10) xodon-get nuk-te-m met uör-pe?
 どこ -ABL 見つける -FUT-INT/T1SG 私 子 -PL
 「どこで子どもたちを（私は）見つけられようか」

これらの例ではいずれも主語は文頭に立たず、(8)では副詞の後、(9)では目的語の後、そして(10)では定形動詞の後に位置している。中でも例文(9)と(10)は、この言語の基本的語順からはかなり逸脱した例だと言える。このような位置の変動にもかかわらず、主語が一貫して基本格標示を受けていることから、主語の基本格標示がきわめて安定していることが確認される。

その一方、他動詞節における目的語の標示に現れる形態論的標識は多様である。中でも顕著なのは、筆者もすでに述べたように（遠藤 2012:14-17）、「1・2 人称＞3 人称」という人称階層のもとで、階層上高い主語から低い目的語に動作が向かうときには、目的語に形態論的標示が現れないという現象である。このとき、主語と目的語はともに基本格で標示される。

- (11) met Nikolaj-die folgi.
私 ニコライ -DIM 殴る /T1SG
「私はニコライ君を殴った」(1 人称→3 人称)
- (12) tet Nikolaj-die folgi-mik.
君 ニコライ -DIM 殴る -T2SG
「君はニコライ君を殴った」(2 人称→3 人称)

これとは逆に、階層上低い主語から高い目的語に動作が向かうときには、目的語に何らかの形態論的標示が現れる：

- (13) Nikolaj-die met-kele folgi-m.
 ニコライ -DIM 私 -ACC 殴る -T3SG
 「ニコライ君は私を殴った」(3人称→1人称)

- (14) tittel tet-kele juö-ŋam.
 彼ら 君 -ACC 見る -T3PL
 「彼らは君を見た」(3人称→2人称)

一方、主語と目的語が階層上同じ地位にあるときには、対格システムの原則を反映し、目的語に形態論的標識が現れる。1, 2 人称間ではこの標識は -ul である：

- (15) met tet-ul juö.
 私 君 -ACC 見る /T1SG
 「私は君を見た」(1人称→2人称)

- (16) tet met-ul juö-mik.
 君 私 -ACC 見る -T2SG
 「君は私を見た」(2人称→1人称)

3 人称間では、この標識は -gele あるいは -le である。この両者の機能の違いについてはまだ詳しい考察が必要であるが、一般的に言って -gele は目的語の定性が高い場合—(17)のように指示対象が明確な場合や(3), (9)のように修飾要素によって意味的に限定される場合—toに現れる：

- (17) tudel Nikolaj-die-gele folgi-m.
 彼 ニコライ -DIM-ACC 殴る -T3SG
 「彼はニコライ君を殴った」(3人称→3人称)

なお、この標識の音韻的に条件づけられた異形態である -kele が、上記の例文(13), (14)のように、3 人称主語・1, 2 人称目的語の場合にも現れることに注意されたい。これらに対して -le は一般に目的語の定性が低い場合—(18)のように不特定の場合(下線部)や(4)のように任意の場合(矢のうちの任意の一本)—に現れる⁸⁾：

8) 例文(4)の lukile「矢を」の -e は、子音語幹に後続する際に現れる -le の異形態である。

- (18) tat emej-gi qa[ə-lə] a-m, [...]
 それから 母 -POSS 粥 -INST 作る -T3SG
 「それから母は粥を作った (…)」(Nikolaeva 1997:30)

この言語では、目的語に焦点 (focus) が標示されることがある。焦点標識 -lek ~ -(e)k は能格システムにおける絶対格と同じ分布を示し、(19) のように自動詞主語に、また (20) のように他動詞目的語に標示されうる。他動詞主語に焦点標識が置かれた例は見出されない。

- (19) ta: irkin luge-je luge-je terike-lek mol-l'el-u-l.
 そこに 1 の 年老いた -PTCP 年老いた -PTCP 妻 -FOC 言う -EVID- φ -SF
 「そのとき 1 人の年老いた老婆が言ったそうだ」
- (20) tudel mol-l'el alme, kukul marɣl'uo-k
 彼 言う -EVID/I3SG シャーマン 悪魔 娘 -FOC
 merej-f-l'el-mele kuʒu:-get.
 飛ぶ -CAUS-EVID-T3SG/OF 空 -ABL
 「シャーマンは言った、悪魔が娘を空から飛ばしてきたのだ (と)」

焦点は動詞の側においても標示される。次に示すのは自動詞主語と他動詞目的語に焦点が置かれた場合の、動詞の人称屈折のパラダイムである⁹⁾：

- | | | | |
|------|---------|----------------|-------------------|
| (21) | | kel 「来る」 (自動詞) | tadi: 「与える」 (他動詞) |
| | 1 人称単数 | kel-u-l | tadi:-me |
| | 2 人称単数 | kel-u-l | tadi:-me |
| | 3 人称単数 | kel-u-l | tadi:-mele |
| | 1 人称複数 | kel-u-l | tadi:-l |
| | 2 人称複数 | kel-u-l | tadi:-met |
| | 3 人称複数： | kel-ŋil | tadi:-ŋile |

ここで興味深いのは、焦点標示が格標示と共起しないということである。たとえば (20) の場合、主語と目的語は共に 3 人称単数であるにもかかわらず、(17), (18) に見られたような目的語側での格標示の標識 (-gele あるいは -le) は現れない。同じ原則は、たとえ格標示の標識が表面的に現れなくても貫かれる。たとえば (22) の下線部のように、この言語では、被所

9) 左側の kel 「来る」のパラダイムに現れる母音 u は、コリマ・ユカギール語でしばしば子音連続を避けるために挿入される母音である。意味的な内実とは伴っていない。

有名詞は焦点標識なしでも焦点を置くことができる。動詞側には焦点標示が現れていることに注意されたい。

- (22) ta:t tanj paj-ŋin tude makil tadi:-l'el-mele.
 それから その 女 -ALL 彼の服 与える -EVID-T3SG/OF
 「それから（彼は）その女に自分の服を与えた」

しかしながらこの場合、焦点標識の代わりに格標示の標識が現れることはない。このことはおそらく、焦点の置かれた名詞句が本来的に格標示の標識を欠いていることを示していると考えられる。コリマ・ユカギール語では焦点標示と格標示は互いに拮抗する体系であり、両者が同一の節の中に共存することはないのである。

2.2 ツンドラ・ユカギール語

次に、ツンドラ・ユカギール語からの具体例をあげ、他動詞節における目的語の標示について検討する。節の基本的な構造、および動詞の自他による人称屈折の違いはコリマ・ユカギール語と同様であるので、以下では直ちにデータの検討に入る¹⁰⁾。

ツンドラ・ユカギール語においても、以下の諸例から一般的に観察されるように、自動詞節におけるSと他動詞節におけるAはゼロ標識の格（基本格）で標示される。これに対して、他動詞文におけるOには何らかの形態論的標識を伴った格が標示されうる。ただしその標示には、「1・2人称＞3人称」という人称階層に基づく制約がかかる。例(23)と(24)は階層上高い主語から低い目的語に動作が向かう場合であり、このときには主語と目的語はともに基本格で標示される。

- (23) met tudel me=paj-ŋ.
 私 彼 FOC= 打つ -T1SG
 「私は彼を打った」[75]（1人称→3人称）
- (24) tadat labunmenj pojuol me=pun-na-ŋ, [...]
 それから 雷鳥 たくさん FOC= 殺す -INC-T1SG
 「それから（私は）雷鳥をたくさん殺しはじめた（…）」[255]（1人称→3人称）

これに対して、例(25)から(32)までは階層上低い主語から高い目的語に動作が向かうなど

10) 2.2節におけるデータは、特に記したものを除き、Krejnovič (1958) から引用した。煩雑さを避けるためにこの節では著者名・出版年を省略し、ページ数のみを角括弧の中に示した（たとえば[75]はKrejnovič (1958)の75ページの意味）。

上記以外の場合であり、目的語に何らかの形態論的標示を伴った格が現れる¹¹⁾：

- (25) tudel met-qane me=pot'esej-m.
 彼 私 -LOC FOC= 送る -T3SG
 「彼は私を送った」[76] (3 人称→1 人称)

- (26) tudel tet-qane me=pot'esej-m.
 彼 君 -LOC FOC= 送る -T3SG
 「彼は君を送った」[76] (3 人称→2 人称)

主語と目的語が階層上同じ地位にあるときには、目的語に形態論的標識が現れる。1, 2 人称間ではこの標識は -ul である。

- (27) met tet-ul me=paj-ŋ.
 私 君 -ACC FOC= 打つ -T1SG
 「私は君を打った」[75]

- (28) tet met-ul me=paj-mek.
 君 私 -ACC FOC= 打つ -T2SG
 「君は私を打った」[75]

一方 3 人称間ではこの標識は -qane ~ -kane あるいは -le である。前者は一般に (29), (30) のように目的語の定性が高い場合に用いられるのに対し、後者は一般に (31), (32) のように目的語の定性が低い場合に用いられる。

- (29) tudel titte-qane me=pot'esej-m.
 彼 彼ら -LOC FOC= 送る =T3SG
 「彼は彼らを送った」[76] (3 人称→3 人称)

- (30) nimend'i: titt (e) uor-pe-kane me=tadi-ŋa
 主人 彼らの 子 -PL-LOC FOC= 与える -T3PL
 「主人たちは自分の子どもを与えた」[55]

- (31) tudel nime-le me=wie-m.
 彼 家 -ACC FOC= 作る -T3SG

11) ツンドラ・ユカギール語には 2 種類の所格 -ka と -kane (ならびにそれらの異形態) があり、後者は前者より限定の度合いが低い場合に用いられる (Krejnovič 1958:54)。

「彼は家を作った」[48]

(32) köde-gi mon-ni “teni nime wie-k.” nime-le me=wie-m.

夫 -POSS 言う -I3SG ここ 家 作る -IMP/2SG 家 -ACC FOC= 作る -T3SG

「夫は言った『ここに家を作れ』。(その人は) 家を作った」[47] ¹²⁾

なお、上記の諸例で具体的に現れる形態論的標識には、コリマ・ユカギール語とは並行しないものもある。たとえば例(25), (26), (29), (30)に現れる目的語の格標示の標識は、所格の一種である -kane ~ -qane である。また例(31), (32)に現れる標識 -le は、具格(ツンドラ・ユカギール語では -lek)とは異なる形式である。

ツンドラ・ユカギール語においても、焦点は項と動詞の両方に、形態論的に標示されうる(標識は -le(η) ~ -(e)k)。例(33)は自動詞主語に焦点が置かれた場合であり、(34)は他動詞目的語に焦点が置かれた場合である。

(33) kin+göde-k niwal' saḡane-ŋul.

2の+人 -FOC そば 座る -I3PL/SF

「2人の人がそばに座っていた」[258]

(34) met ama ma:rqaṇ n'awn'iklie-k pul-l'el-mele.

私 父 1の 北極狐 -FOC 殺す -EVID-T3SG/OF

「私の父は1頭の北極狐を殺した」[256]

コリマ・ユカギール語との顕著な違いは、ツンドラ・ユカギール語では他動詞主語(A)にも焦点を置くことができるということである。ただしこのとき、A自体には形態論的標示が現れず、動詞側にのみ標示が現れる。

(35) kin pun'? — ama pun'.

誰 殺す/SF 父 殺す/SF

「誰が殺したか? — 父が殺した」(Krejnovič 1968:438) ¹³⁾

以下に示すのは、左から順に自動詞主語・他動詞主語・他動詞目的語に焦点が置かれた場合の、動詞の人称屈折のパラダイムである¹⁴⁾。他動詞主語に焦点が置かれた場合、動詞の人称屈折は非常に簡略化され、他のパラダイムとの対照から複数標識と分析できる -ŋu を除けば、ほと

12) 例文(32)において、命令文「ここに家を作れ」の中の目的語 nime「家」は、主語が2人称単数、目的語が3人称単数なので、上述の人称階層を考慮し、基本格で標示されている。

13) 例文(35)と(38)は2人の人物の間の対話(質問とその答え)となっている。

んど語幹そのものしか残っていない点が注目される。

(36)	u: 「行く」 (自動詞)	pun' 「殺す」 (他動詞)	
1 人称単数	u:-l	pun'	pun'-meŋ
2 人称単数	u:-l	pun'	pun'-meŋ
3 人称単数	u:-l	pun'	pun'-mele
1 人称複数	u:-l	pun'	pun'-i-l
2 人称複数	u:-l	pun'	pun'-i-mk
3 人称複数	u:-ŋul	pun'-ŋu	pun'-ŋumle

ツンドラ・ユカギール語の焦点標示において興味深いのは、他動詞主語に焦点が置かれた場合に限り、目的語に格標示が現れうることである。

(37) taŋun-ɤane kin wie?

これ -LOC 誰 する

「これは誰がしたか？」 (Krejnovič 1982:239)

(38) ile-le kin pun'? — Tatuor pun'.

トナカイ -ACC 誰 殺す /SF タトゥオル 殺す /SF

「トナカイは誰が殺したか？ — タトゥオルが殺した」 (Krejnovič 1982:209)

これらの例ではいずれも他動詞主語に焦点が置かれている (形態論的にはゼロ標示)。一方、目的語に格標示 ((37) での -ɤane, (38) での -le) が行われていることも確認できる。これらの例が示すように、ツンドラ・ユカギール語では、コリマ・ユカギール語とは異なり、焦点標示と格標示は一部で共存することが可能である。これは両言語間の注目すべき相違点である。

2.3 まとめ

以上の検討の結果を以下の表にまとめておく。他動詞目的語 (O) の格標示は多様であり、表も複雑にならざるを得ないため、その部分のみ独立させて別に示す¹⁵⁾。

✓ 14) 一番右の pun' 「殺す」のパラダイムの一部に現れる母音 i は、ツンドラ・ユカギール語でしばしば子音連続を避けるために挿入される母音である (挿入母音)。意味的な内実は伴っていない。

15) O の格標示の表 (次頁) では、縦軸が A の人称を、横軸が O の人称を示す。たとえば A が 2 人称の主語で、O が 3 人称の目的語の場合、形態論的標識はゼロである。

	コリマ・ユカギール語	ツンドラ・ユカギール語
Aの焦点標示	不可能	- ϕ
S/Oの焦点標示	-lek ~ -(e)k	-le(ŋ) ~ -(e)k
A/Sの格標示	- ϕ	- ϕ
Oの格標示	多様 (下図参照)	多様 (下図参照)

コリマ・ユカギール語のOの格標示：

A \ O	1 人称	2 人称	3 人称
1 人称		-ul	- ϕ
2 人称	-ul		- ϕ
3 人称	-kele	-kele	-gele, -le

ツンドラ・ユカギール語のOの格標示

A \ O	1 人称	2 人称	3 人称
1 人称		-ul	- ϕ
2 人称	-ul		- ϕ
3 人称	-qane	-qane	-kane, -le

3. ユカギール語の他動詞節における標示システムに反映される類型論的パラメータ

以上、コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の両言語にわたり、他動詞節における目的語の標示を中心にデータを検討し、両言語に見られる様々な文法的特徴を指摘してきた。この節では以上の検討を受け、ユカギール語の他動詞節における標示システムに反映されていると考えられる類型論的パラメータをいくつか指摘することにした。

3.1 能格性と対格性

焦点標示のシステムには能格性の反映が見られる。なぜなら、すでに指摘したように、焦点標識が現れうる位置が、能格システムの格標示を持つ言語における絶対格 (absolute case) の分布とほぼ平行的であるからである。この状況はコリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の両方にわたって見られるので、ひとまずユカギール語全体に共通した特徴として指摘できよう。すでに第1節で概観したように、能格システムの格表示を持つ言語では、自動詞主語 (S) と他動詞目的語 (O) が絶対格で標示されるのに対し、他動詞主語 (A) は能格 (ergative case) で標示される。ユカギール語の焦点標識の能格型分布についてはすでにコムリーが概説の中で指摘しているが (Comrie 1981: 246-52)、格標示と焦点標示という文法的領域の違いを別にしても、この言語に関して注目すべき類型論的特徴であろう。

では能格システムとユカギール語の焦点標示のシステムとの間の平行性は、どのようにしてもたらされるのだろうか。筆者が自ら行った若干のテキスト資料の分析から見る限り、ユカギール語における焦点の機能は、おおむね3点であると考えられる。第1に最も一般的なのは新しい情報を談話に導入する機能である。自動詞主語に焦点が置かれる場合は特にこの機能が発揮されることが多い。第2に古い情報に談話内で改めて注意を喚起する、いわば再活性化の機能である。他動詞目的語に焦点が置かれる場合にはこの機能が活用されることがある。そして第

3に2つ（以上）の要素を談話内で対照する機能である。これらのうち、第1と第2の機能を広い意味での新情報導入の機能として考えれば、この機能は、Du Bois (1987) で論じられている能格性の談話的基盤と関連を持つと考えられるだろう。すなわちデュボワは、談話に新たに参加するNPが圧倒的にSとOの位置に出現するという、談話における極めて強い傾向をデータから見出し、これを能格性の重要な談話的基盤として指摘した(827-829)¹⁶⁾。同様の事実は、格標示のタイプにかかわらず世界各地の言語に一般的に見られるともいう(837-839)。このことはユカギール語の焦点標示にも関連する重要な指摘であると思われる。言うまでもなくユカギール語においても、デュボワの指摘した通言語的な一般性は妥当し、談話に新たに参加するNPはSとOの位置に現れやすい。とすれば、この状況を広い意味での新情報導入として文法化し、それを共通した標識によって標示することは、十分な動機づけを持つ。ただし、能格システムとの相違点に言及するとすれば、ユカギール語の場合には、焦点標識が形態論的に有標の形式であるという点がある。この点については、新情報導入という機能を談話内で発揮しやすいように、有標の形式が選ばれているという正当化を行えるのではないかと考えられるけれども、機能的な面から見た能格システムとの対照も含めて、将来明らかにされるべき課題である。

ユカギール語の焦点標示に関しては、能格システムとの相違点がもう一つある。それは、ユカギール語では一般に、他動詞主語(A)への焦点標示が稀だということだ。上記の表に見られるように、コリマ・ユカギール語ではAへの焦点標示がそもそも不可能である。またツンドラ・ユカギール語ではAへの焦点標示は不可能ではないものの、テキスト内での実例は決して多いとは言えない。クレイノヴィチがあげた上記の例文は非常に短いので、おそらくテキスト資料のような自然な談話から取られたものではなく、母語話者からの elicitation によるものではないかと思われる。このことは、能格システムにおける「能格」の位置を占める要素がユカギール語にほとんど欠落していることを思わせるのではないだろうか。

テキスト資料の検討から指摘できることは、ユカギール語の談話における極めて強い傾向として、言語類型論で言う S/A pivot が強く働いているということである。これは特に民話テキスト資料の多くに見られる節連鎖 (clause chain) に強く見られる傾向であり、コリマ・ユカギール語ではいわゆる指示転換 (switch-reference) としてとらえることができるほど文法的に確立している。コリマ・ユカギール民話の一部である次の節連鎖の例を観察されたい。

(39) ta:t o:juol'i-t akurpe-t tude uör-pe ejej-nu-l'el-mele.

それから [渴く -CONV] [怒る -CONV] 彼女の 子 -PL 呼ぶ -PROG-EVID-T3SG/OF

16) この強い傾向をデュボワは「(情報的に) 新しいAを避けよ」(Avoid new A's.) という制約として一般化している (Du Bois 1987:827)。この制約は、以下で論じるユカギール語の状況に対しても同様に働いていると考えられる。

「それから（母親は）のどが渇き、怒り、自分の子供たちを呼んだ」

これはある母親を主人公とした民話の一部である。談話内ですでに確立している情報である「母親」は、節連鎖の最初の自動詞節でSとして現れ、次の自動詞節にもSとして継承され、最後の他動詞節（主節）でようやくAとなる。これらを結ぶ副動詞 -t は一種の S/A pivot として機能している。一方最後の節ではOに焦点が置かれ、新情報（tude uörpe 「自分の子どもたち」）の導入が行われている。このようなパターンの節連鎖—すなわち自動詞節を連ねた後に他動詞節のOで新たな情報を導入する—は民話テキストに多く見られ、古い情報から徐々に新しい情報に進むという点で、情報構造上も自然であると考えられる。この逆の状況、つまりAに取って焦点を置き、節連鎖の先頭で唐突に新しい情報を提示するという状況は、談話の一般的な流れに反しているのも、実際にはきわめて起こりにくく、したがって文法化の契機も得られにくいだろう。おそらくはこのことが、ユカギール語全体にわたってAの焦点標示が十分発達していないことの大きな原因ではないだろうか。

格標示のシステムに対格性の反映が見られることは明らかである。すなわち主語（S/A）にはゼロ標示である基本格が現れ、これに対して何らかの形態論的標識を伴った格標示が現れる位置は常にOであるからである。このことからユカギール語の格標示システムはひとまず対格システムと規定できようが、それではこのような標示システムの基盤はどこに求められるのだろうか。上で概観したデュボワの研究はまた、対格性の基盤として、SとAには典型的に人間、動作主、トピックが現れやすいという通言語的な一般性を指摘している（Du Bois 1987:839）。ユカギール語の格標示システムが全体的に対格システムとなっている基盤も、おそらくはこの点に求められよう。

ユカギール語の場合、上で検討した焦点標示のシステムの中で、基本格は形態論的に無標の形式（ゼロ標識）として、新しい情報を導入しうる有標の焦点標識と対立する。したがって基本格の機能の1つとして、消極的にはあれ古い情報を標示しうる機能を想定することができよう。格標示のシステムにこの機能が利用されたとすれば、デュボワの指摘にある通り、談話上のトピック（典型的には旧情報）が置かれることの多いSとAに基本格が当てられることは、体系上大きな齟齬をきたさない。加えてユカギール語の場合、例（39）に見るようにS/A pivot の働きが非常に強いことも、このようなシステムの有効性を強めると考えられる。

以上に考察してきた両特徴、すなわち能格性と対格性は、ユカギール語の内部ではどのように組み合わせられているのだろうか。焦点標示と格標示の競合の状況からこの点を考察してみよう。すでに2.1節で考察したように、コリマ・ユカギール語では焦点標示と格標示は共起することがない。この両者間でどちらが優先するかを考えるなら、この言語の場合、焦点標示の方が格標示に優先すると考えたほうが良いと考えられる。たとえば例文（22）における目的語の標示をここで再度考察してみる。先に格標示を行うと仮定してみると、その場合、原則に従っ

ていったん付与された格の標識（おそらくは -gele）を、焦点標示が削除してゼロ標識に戻すという、かなり人工的な操作（tude makil → tude makil-gele → tude makil- φ）を想定しなければならないことになる。一方、先に焦点標示を行うと仮定した場合、焦点が置かれ、かつ被所有名詞であるゆえにゼロ標識を付与された目的語は、以後の格標示を阻むと考えるだけでよい。この両者を比べた場合、後者の方が人工的な操作を含まないため、より自然であると思われる。

これに対してもう一方のユカギール語であるツンドラ・ユカギール語では状況がやや異なっており、焦点標示と格標示は一部で共存が許される。たとえば例文（37）を再度考察してみよう。この場合、先に焦点標示が行われたと仮定しても、その結果に対して、更に格標示の操作を適用することが可能であると考えられる。他動詞目的語への目的語の標識の付与（tajun → tajun-kanе）は、このような操作のもとで可能になっていると考えられるのではないだろうか。

3.2 人称階層・定性・情報構造

2.3 節にあげた表を見る限り、ユカギール語は、特に他動詞の目的語の標示についてかなりの多様性を示す。これはある意味で、多様すぎると言えなくもない。なぜならコリマ・ユカギール語でも、ツンドラ・ユカギール語でも、格標示システムに4種類もの目的語の標識が現れるからである。これに焦点標示を加えるなら、ユカギール語の他動詞の目的語は5種類もの標示を受けうることになる。どのような要因がこのような複雑な状況に反映しており、それらはどのような類型論的パラメータと関係しているのだろうか。

近年の言語類型論では、Differential Object Marking (DOM) という概念を用いて、主として対格システムの格標示を持つ言語における、目的語の多様な格標示の通言語的な研究がすすめられている。DOM が生じうる要因としては様々なものが指摘されているが、Malchukov and De Swart (2009:345) は、目的語の個別性 (individuation) の度合、有生性 (animacy)、定性 (definiteness)、特定性 (specificity) などが頻繁に見られる要因であると指摘している。この用語を使うならば、ユカギール語もまた多様な DOM を示すという類型論的特徴を示すことになろう。この観点からユカギール語の目的語の標示を眺めるとすれば、どのような類型論的視野が描けるだろうか。

ユカギール語の場合、目的語の標識の選択に際して主語と目的語の人称の関係が関与していることが、多様な DOM の状況を生み出している第1の要因である。筆者もすでに指摘を行ったが、これは目的語そのものを標示するというよりはむしろ、主語と目的語との間の隔たりを標示しているともいうべき特徴である（遠藤 2012:17）。その場合、準拠枠として絶えず参照されているのは「1・2 人称 > 3 人称」という階層であることはほぼ確実と思われるが、この準拠枠自体はシルバースティーンの名詞句階層の一部と重なる。この点は言語類型論の視点から興味深い。角田（2009:41）はシルバースティーンの名詞句階層を次のようにまとめている：

(40) シルバースティーンの名詞句階層 (角田 2009:41)

代名詞			名詞		
1 人称	2 人称	3 人称	親族名詞, 人間名詞 固有名詞	動物名詞	無生物名詞 自然の力 抽象名詞, の名詞 地名

ユカギール語における目的語の標示の準拠枠となっていると考えられる上記の人称階層は、この名詞句階層の左端に注目し、名詞全体を3人称として一括したものと考えられる。唯一の違いは、ユカギール語においては1人称と2人称が階層上同じ地位に立ちうる点である。2.3の表から見るように、1・2人称間で現れる標識 -ul は他とは異なる形式であるので、ここには発話関与者とそれ以外という対立が持ち込まれている可能性が考えられよう。

ユカギール語における多様な DOM に関与している第2の要因は、目的語そのものの定性である。この要因は、ツンドラ・ユカギール語とコリマ・ユカギール語の両方にわたって見られる。たとえば主語と目的語がともに3人称の場合の交替（コリマ・ユカギール語における -gele と -le, またツンドラ・ユカギール語における -qane と -le の交替）は、より詳しい資料の分析が必要ではあるものの、一般的にはこの定性という要因によると考えられよう。さらに、1人称と2人称の目的語の標示に、-gele の異形態の -kele（コリマ・ユカギール語）と、-qane の異形態の -qane（ツンドラ・ユカギール語）が現れるケースもここに加えることができる。1人称と2人称の目的語が本来的に高い定性を持つ要素（代名詞）であることを考えると、ユカギール語では一般に、主語が3人称の場合、目的語は定性によって交替しうると考えられよう。定性のような要因による DOM は、Malchukov and De Swart (2009:345) によれば決して特異なものではないが、ユカギール語はこの要因を文法の細部に織り込むことによって、結果として複雑な DOM を成立させていると言える。

ユカギール語における多様な DOM に関与する3番目の要因は情報構造であり、これによって焦点標示の有無が選択される。焦点は目的語そのものには内在せず、文のレベルでの情報構造を考えたときに同定できる語用論的な要因であるから、上とは別種の要因として考えておくべきであろう。このような語用論的な要因は、Malchukov and De Swart (2009) の行った DOM の生じる要因の概観には指摘されていない。このような語用論的な要因を反映した DOM の状況は、コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語にわたって幅広く見られるので、ユカギール語はこの点で、類型論的にはユニークな特徴と示すと言えるだろう。

以上、ユカギール語の DOM に関して、そこに関与していると思われる3つの要因をあげて論じ、それぞれに反映していると考えられる類型論的なパラメータを指摘してきた。この考察によって、ユカギール語の DOM の複雑さは、これらの要因が働くことによって出現したものであり、考察を進めることによってそこには様々な類型論的なパラメータの反映が認められること

がある程度明らかになったと考えられる。

4. 結びにかえて

他動詞節における目的語の標示という文法現象は、ユカギール語の文法体系の中においても、非常に小さな領域を占めるものにすぎない。しかしながら、このように小さな文法現象においてさえも、人類言語に通底する様々な類型論的パラメータの相互作用が精妙に織りなされる様が観察された。このことがユカギール語の目的語の標示の詳細な観察と、類型論的視野からの検討から得られたことを考えれば、本論文で扱った現象は、類型論的視野の有効性と、少数言語の研究の可能性を示すと言えるのではないか。本論文で描いた類型論的な考察はまだ素描の段階に過ぎないが、今後ユカギール語資料のより詳細かつ多角的な検討を重ねていくための興味深い構図を提供してくれる可能性があるだろう。

【謝辞】 コリマ・ユカギール語のデータを収集するにあたり、筆者の数回の現地調査の際、筆者を暖かく迎え入れてくださったネレムノエ村の皆様方に感謝申し上げます。またこの論文は以下の科学研究費補助金による研究の成果の一部です：科学研究費補助金基盤研究（B）「北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究」（課題番号 21401022）および同基盤研究（C）「コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造の関連究明による統語論記述の精緻化」（課題番号：22520434）。

略語一覧

ABL=ablative (case), ACC=accusative (case), ALL=allative (case), CAUS=causative (voice), CONV=converb, DIM=diminutive, EVID=evidential (mood), FUT=future (tense), I=intransitive, INC=inochoative (aspect), ILL=illative (case), IMP=imperative (mood), INT=interrogative (mood), INST=instrumental (case), LOC=locative (case), OF=object focus, PL=plural, POSS=possessive, PROG=progressive, PROL=prolative (case), PTCP=participle, SF=subject focus, SG=singular, T=transitive, VN=verbal noun, 1=first person, 2=second person, 3=third person.

参考文献

- Comrie, Bernard (1981) *The languages of the Soviet Union*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Du Bois, John W. (1987) "The discourse basis of ergativity". *Language* 63 (4) : 805–855.
- 遠藤 史 (2012)「強い対格と弱い対格—対格の類型論のための試論—」『経済理論』第 366 号 :1–21. 和歌山大学経済学会.
- Krejnovič, E. A. (1958) *Jukagirskij jazyk*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- (1968) *Jukagirskij jazyk*. In: *Jazyki narodov SSSR*. Volume 5: 435–452. Leningrad: Nauka.
- (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Malchukov, Andrej and Peter De Swart (2009) "Differential case marking and actancy variations". In: Andrej Marchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford handbook of case*. Oxford: Oxford University Press. 339–355.
- Nikolaeva, Irina A. (1997) *Jukagir texts*. Specimina Sibirica XIII. Szombathely: Savariae.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版：言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版.

On Object Marking in Transitive Clauses in Yukaghir

Fubito ENDO

Abstract

Yukaghir, an endangered language family spoken in northeast Siberia, exhibits a five-way distinction in its object-marking system, where the object in a transitive clause can be marked by a grammatical case or a grammaticalized focus. This paper first aims to describe the intricate object-marking system in the two existing Yukaghir languages, Kolyma Yukaghir and Tundra Yukaghir, by examining various aspects of case- and focus-marking on objects. Some remarkable similarities and differences between the two Yukaghir languages are also surveyed and discussed. The author further investigates how typological parameters, such as ergativity, accusativity, person hierarchy, definiteness, and recurrent patterns of information flow, interact to make up the object-marking system.